マーケットの補足

1.目的

マーケットを解析して補足すること。

※補足するということは、入ってきた情報を元にどう動くかの情報を補足すること。

(予知ではない)

2.解析に使う素材

マーケットと相関関係があると、唯一証明できる、

時刻、と、価格、のみ素材として使用する。

(時刻と価格から作る指標以外は使わない)

3.マーケットの捉え方

マーケットはある一定の時間の中で、ある一定の価格の範囲で動いていて、

相場を形成している。

相場はどの時間(時間足)で見ても、波を打っている。

マーケットを波として捉え、解析していく。

4.波の構成要素

波を構成するということは、

①転換する(波が返す)場所がある

②転換から転換まで連続して続かなければならない

という前提条件がある。

連続して続かなければならないという前提条件があるということは、マーケットの相場は必ず時間接続されるということ。

そして、描かれる波は、

③どのくらいの大きさの波なのか(大きい波なのか、小さい波なのか)

ということがわかれば良い。

つまり、

(1)転換場所(どこで転換するのか)

(2)時間(どの時間まで接続されるのか)

(3)距離(どこまで伸びるのか)

がわかれば、マーケットを補足できる。

5.何を使って、どのような手順で解析するのか？

唯一相関関係があると証明できる時刻と価格しか使わない。

小さな流れ、大きな流れを見るために、時間で分けて見ていく。

→時間を切り分ける(大きい流れ、小さい流れ、をそれぞれ見るため)。

→平均で見る(平均的な流れを見るため)。

→前足が乖離したところを見る(転換する可能性があるため)。

→同逆つける(どこまで接続されるか見るため)。

※ここまでは、連続して、同じ時間、同じ量動くとした場合の話し

6.転換する可能性のある場所

流れとして見るために、平均足を使う。

今見ている時間足(今足)は、前の時間の足(前足)の積算でできているため、

今足が転換する場合には、必ず、前足で転換が先に起こる。

つまり、前足が転換したところが、今足が転換する可能性がある場所、と特定することができる。

7.時間の接続(同逆)と座標

ある時間足(足一本の最高値最安値)の間で価格が動いているということは、価格がその足よりも平均として伸びないということ。

※平均として伸びないので、ある時間足の価格の間にいる時は、その時間足よりも短い時間の足で取引するということになる。

今、価格はどこにいて、どの足の間で動いているのか、を見る。

足の中に価格がある間は平均として伸びない。

上に行けば高値更新、下に行けば転換。

図：足1本の間で価格が動いている場合

価格が伸びる場合は、次に形成する足が、積算として最高/最安値を超えていく必要がある。

転換するには、確定した足の最高/最安値を超えていかないといけない。こえない場合は、その足の間の価格でもみ(更新も転換もしない)状態になる。

どの時刻(時間足)で転換が起きそうなのか(どの時間足で前足乖離してきたのか)？

それぞれの時間足がどっちの方向を向いていて、

どこまで同逆揃っているのか？

(64パターンのうちのどれ?)

状況状態を確認する必要がある。

1年

どの位置関係で、

どのレンジの中の、

どの位置にいるのか、

座標を特定する。

その上でどっちの方向に抜けようとしているのか、

同逆を特定する。

1ヶ月

1週間

　1日

　 4時間

図：マーケットの波を時間で区分して見ているときの価格の座標

8. どこまで伸びるのか？(転換と乖離→伸びるかどうか？)

(1)レンジの特定

・マーケットは波を形成しているが、一定時間で一定量入り続けるわけではない。

・前足が転換してきて、今足が転換する可能性がある場所はわかっても、実際にそこで転換が起きるかどうかはわからない。

→伸びるかどうかは別の話し

実際に転換して、波が伸びていくのか、は別のものを見る必要がある。

平均で取っていると、指標で差が出てくる。

(実勢の動きが大きいと、平均が実勢の動きについてくる。実勢の動きが小さいと、平均同士が寄ってくる)

そこでレンジを使う。レンジを抜けていくのかどうかを見ていく。

これは、流れを作って、トレンドとしていきますか？ということを見るということ。

レンジを特定し、レンジを抜ける方向が揃って、走っているかを確認していくことで、伸びるかどうかを見ていく。

特定するレンジは3つ。

足レンジ、価格レンジ、時間レンジ。

これら3つは、内方関係にあり、

価格レンジを抜けるには足レンジを越える必要があり、

時間レンジを抜けるには価格レンジを越える必要がある。

レンジを区分し、価格先行(トレンドとしてではなく、価格だけが伸びている)かどうかを見て、伸びていくかどうかを見る。

(2)周期特定と抜けていく方向性の確認

レンジが特定できたら、その時点での波の周期を特定し、抜けていく方向性を出していく。

周期特定の考え方；

レンジ内に平均線が入ってくる。

レンジ内に、平均線が入るというのは、そのレンジの価格に対して、平均が寄っているということ。

レンジの中にある平均線同士は、それぞれその範囲に平均が寄ってきていていることになるため、中に入ってきている平均線で流れを見ようとしても、狂うことがある。

そこで、その細かい動きとは違う次の周期を見て、流れを見る。

レンジに入ってきた最大周期の次の周期を特定し、その周期に対して、MACとOSを見ることで、抜け方向を確認する。

(3)レンジとトレンド

重要なのは、価格のトレンド。

トレンドを作る時、価格が動いていくことがトレンド、ではない。

価格の動きに、平均もついてきて、動いてきているかどうかがトレンド。

波は、入ったものは必ず出る。

マーケットも同じで、過去に入ったものは必ず出る。

過去の分を決済しただけだと、トレンドは変わらない。

新規で入って、決済して動いているとトレンドが形成される。

平均足だけが変わっても、そのまま伸びるかどうかはわからないが、

レンジを超えていくのであれば、トレンドとして、伸びていくかどうかがわかる。

形成されているレンジを、平均線も超えてこなければ、トレンドとしてその方向にはいかない。

※平均線

価格の動きの差が同じでも平均線は同じ形にならない。

前の価格のトレンドを反映する(一定時間一定量入り続けるわけではない)ため。

これは平均線の指標特性。

その時に、どこまで時間接続されているのか、は大事な確認ポイントとなる(7.参照)。

(4)確認ポイント

各レンジを特定してから、

・レンジに価格が当たった時

・レンジの中に平均線(周期)が入った時

・平均線に価格がついた時

・パラボの部分が直近のレンジに入ったとき

・パラボがレンジに当たった時

がレンジにおける確認ポイントとなる。

また、価格レンジのところで、

・交点(2日線と5日線の交点)きているか？

(10日線よりも、先に2日線や5日線から動くのでこの線を見るというだけ)

・流れをフォローしているかどうか？

・交点の位置はレンジの中にあるのか外にあるのか。

・徐々に交点の位置は上がってきているのかどうか。

も確認ポイント。

(5)抜けるかどうかの見方

基本的に、抜けていくには、各指標の指す方向が揃っている必要がある。

逆を向いていると、もみ、になる(力を打ち消し合う方向に働くので)。

ここで、一定して同じ量が入るわけではないことと、他通貨の影響も受ける事により、MACはあくまで向かう方向性を示していて、量は取れない。

自通貨の取引が多いからといって、伸びるわけではない。

そのため、MACが抜けていく方向性、揃う方向性を、周期が短いものから重なっていくことを確認していく。

つまり、これは、確認ポイントが来たときに前の時間の動き(内方)を見るということ。

今足のMACの周期の差を見ることと、前足のMACを見ることで見える。

前の足と方向が揃っていたら、流れが繋がっていく方向がわかる。

揃っていたら大きくいく、揃っていなければ大きく行けない。

レンジが抜けるとき、

レンジの中で抜けるという流れが示されたとしても、

レンジの価格を抜けるところで、前足や前々足がその方向をフォローしている動きになっていなければ、抜けていくことができない。

時間レンジを抜けるか見るとき、

価格レンジが抜けて、その後、おろしてまたあげる。

価格レンジができ続ける時がある。この時はどうするのか？

レンジに当たった時に、足が抜けていくのか、前足と前前足がフォローしているかを見る。

MACは基本的に自通貨の平均に対してのもの。

レンジは遷移して、また返ってくる。

MACも、平均足と同じように、前足からしか返してこない。

レンジは先足から返すこともある(その時間価格があまり動かないとそういうことが起こる)。

(マーケットの補足のためのロジックとは別の参考コメント)

・指標や週末のように、特殊ケースで動く場合はいつ起こるかわかるので、

ポジション取らない、や、両立でポジション取る、といような対処をしておけば良い。

その後、再び、マーケットの状況を判断していく。

・大きく動いているときというのは、必ずどこかの通貨に価値が片寄っているはず。

通貨は、国の価値を示しているので、事業のように”やめる”という選択肢はない。

転換する場所がわかって、伸びるところがわかる

+

特殊なところがどこか把握する

ができればOKということ。

内部用詳細

<手順>

1.各時間における価格の位置(座標)を確認

2.取引できる時間足を確認

3.転換が起きる可能性のある場所を確認

4.同逆確認

5.レンジを特定

6.周期を特定

7.確認ポイントで内方確認

※注意

他の時間も見た時に指標の示す方向が揃っているか、

抜けるといったかどうか、

他の指標も比べた上で抜けるか抜けないかを見る。

他の指標も同じことを言っているかちゃんと見ることで、それが検算になる。

どこから見ても答えが一致しているかどうか。

<詳細>

1.各時間における価格の位置(座標)を確認

今見ようとしている時間足としては、

短い時間から、1分、5分、15分、30分、60分、240分の6つを使う。

現在の価格の座標を特定するために、

どの時間足の中にいて、どの時間足の外にいて、どの時間足の上にいるのか下にいるのかを確認する。

そして、どこかの時間足の高値/安値を更新しようとしているところなのか、更新している位置にいるのかを確認する。

状況状態を区分して、確認する。

2.取引できる時間足を確認

1.の確認結果により、その時間足の中で価格がもみ状態の場合は、その時間よりも短い時間足で取引する必要がある。

その価格の中にいる間は、平均を上げられない/下げられない(高値/安値を更新できない)ため。

3.転換が起きる可能性のある場所を特定

前足が乖離してきたところが、転換が起きる可能性がある場所として特定する。

4.同逆確認

1分、5分、15分、30分、60分、240分の6つの足がそれぞれ陽線(上を向いている)なのか陰線(下を向いている)なのか、

同じ方向を向いているか、逆の方向を向いているかを特定し、どこまで接続されているのかを確認する。

5.レンジを特定

各時間足のレンジを特定する。

足レンジ、価格レンジ、時間レンジの３つ。

6.周期を特定

基本的には、5で特定したレンジの中に入っている平均線の次の周期が特定周期とする。

レンジ内に入っている平均線同士は、平均が寄ってしまっているため、時間による差が取れず、流れの方向性がぶれる。

特定した周期で、OSとMACはどっちの方向を向いているか。上に行くのか下に行くのかを確認する。

7.確認ポイントで内方確認

■足の確認ポイント

・平均足と実勢足の乖離

・前足の乖離

→転換する方向に維持されているかどうか？

■レンジの確認ポイント

・レンジに価格が当たった時

・レンジの中に周期が入った時

・平均線に価格がついた時

・パラボの部分が直近のレンジに入ったとき

・パラボがレンジに当たった時

→前足はレンジを抜けているか？

→前足、前前足で特定したレンジから出した周期における、

MAC、OSはどうなっているか？

→維持してそのまま伸びると言っているか？

<まず足をきちんと見る>

マーケットは波(山)を形成する。

山を形成するためには、連続して繋がっていなければならない。

マーケットのチャートでいうと、1分が乖離してきたら、それが5分まで繋がって、15分まで繋がって、というふうに時間で接続されていく。

図：1分が陽線から陰線に転換(乖離)してきて、それが5分、15分まで繋がっていくイメージ。

15分まで接続されたが、30分までは接続されず、30分の時間足は転換しなかったというように、

どこまで接続して返ってくるのか、どの時間まで平均足が転換したのか、それによって同逆が決まる。

(同逆を見るのは、どこまでの時間が接続されたのか、を見る部分)

まずは平均足で、どの時間まで接続されているかと、どこで乖離が発生しているかを確認することができる。

次に見るのは、レンジ(足レンジ)。

足レンジを抜けていかなければ、連続して繋がっていって、転換する/更新する、ということは起こらない。

ここで、次の時間に接続されただけでは、転換する/更新するというわけではない。

例えば、同逆の一致だけ見ると、下のような図になることがある。

下から伸ばしてきていたら、この形になったら15分と5分が同逆一致したことになる。

5min

15min

5min

図：同逆の一致を確認するだけでは更新するのか転換するのかわからない

しかし、一致していると言っても、15分のレンジは超えていないので、15分の足の中でもみ状態、ということになる。

つまり、平均足では、どこの時間までつながったかと、同逆で一致しているかどうかはわかるが、加速するかどうかについては、レンジを抜けるかどうかを見る必要がある。

例えば、1分がレンジを抜けて、またおろしてくる場合。これは、１分は抜けて確定したが、あくまで1分だけが確定した状態。これが5分まで接続されると、5分まで抜けたことが確定したことになる。しかし、もし、5分まで抜けて確定したところで、前足の１分がまたおろしてきていたとしたら、そのまま15分まで接続されて15分も抜けて確定する、ということがこの時点では言えなくなる。

また、例えば、５分が大きく伸ばしたところがあって、１分が上に行って、また下に返して来たとしても、今度は抜けて形成した５分の足レンジを越えないと、５分としては転換しない。ということは、１分が返してきても、5分の足レンジを超えない形で返してきている範囲であれば、５分は上に抜けて確定したということで良いということ。

このまま5分が上で維持し続けて、15分につながって、15分まで確定したら、15分もレンジを抜けた、ということになる。

1min返しても、5分の足レンジを越えてないから5分は上で確定するということ

5min

1min

15min

5min

5min

図：抜けて確定する、の見方。

つまり、各時間で、足レンジを足が抜けたか抜けていないか、その時前足がフォローしてるいかを確認するということ。

１分だけ抜けて確定して、5分まで接続されて5分が抜けて確定したところで、また１分が戻ってきたら、15分は抜けることがでず、15分としてはヒゲになる。抜けているところに始値をつけたかどうか、確認する必要がある。

足を見るとき、基本的にはまずは実勢の足で見る。

実勢を見て、乖離してきたとき、返したところが、線を越えているかどうか。そして、平均が降りているかどうか、平均足が転換しているかどうかを見る。

平均足が転換してきてないところで転換してくることはあり得ないので。

まず、転換するかしないいかを最初見ようとしている。

実勢で見たとき、転換するには平均を超えないといけない。

平均足の転換が起こらないといけない。

平均足を超えないような転換であれば、これは多段、と判断していて良いということになる。

指標単体で見るのではない。そもそものマーケットの構成自体は実勢がベース。

しかし、実勢だけで見ると振られてしまうので、平均として見るために平均足を使う。

再度、

同逆だけ見ていると、内側で同逆できている場合、同じ向きに揃っていても、抜けるかどうかはまだわからない。レンジを抜けたところで同逆揃って初めて、抜けるとわかる。

もみ状態から抜けてない状態で方向が揃ったのであれば、弱い状態で揃っているだけなので、これは弱追加ということになる。

伸びていくには、実際に線を超えて、直近の最高値、最安値を超える形になっていないといけない。

別の例、

上に伸ばしてきている中での15分の足レンジ。

その15分の足レンジの中で、5分の足がおろしてきたとする。その時に、１分が5分の足レンジの中でもみ状態になる場合。

15分の足レンジの中で価格がもみ状態で、５分の流れとしては、下、となっている。その時に、１分の流れは1回上に行って、またおろしてくるという形。この場合、平均としては、5分は変わらないことになる。

もし５分が足レンジを抜けない状態で維持されて、平均足が転換して維持されない状態での１分の動きであれば、これは5分で見た場合5分足のヒゲにしかならない。

１分が行ったときに、５分の足が、転換して、陰線から陽線に変わるのかどうか。

変わらないなら、５分は維持して更新していっているということ。

1分のレンジを超えても、５分のレンジは超えてない。

５分のレンジを超えて、５分が確定したのかどうかまで見る必要があり、

５分が確定していないなら、５分はまだ下を維持しているということになる。

15分の足の中でもみ状態、この中の流れで、５分の流れは下に来ていて、１分は上に来ていて・・・と順番に見ていく。

5min

15min

1min

図：同逆はどうなっていてレンジを抜けるかどうか内包を見ていく

各時間を見ていくと、どの足のレンジでもみ状態かがわかる。

基本的には、平均足が大事で、これでどの時間まで接続された、どこで乖離が発生した、ということがわかる。

・どこまで接続されているか見る

・接続された最大時間の足レンジの中で価格はもみ状態

・接続された最大よりも短い時間足で取引する

次に、もみ状態から抜ける方向を見ていく。

各時間のもみ状態が上に抜けるのか、下に抜けるのかの流れを見るために、MACとOSを使う。

１分のもみ状態は１分のMAC/OSで、５分のもみ状態は５分のMAC/OSで確認する。

別の例

15分の足が連続して下ろしてきているとき。足としては下に更新していても、更新するのか転換するのか確認する場合、元々セットした足レンジが基準となるので、その答えが出るまでは、セットした足レンジを見続ける。

下の図の場合、15分足が、下に更新してきていても、セットした足レンジを抜けていないので、上に抜けるか下に抜けるか答えが出るまで確認する。

また、15分の足が、１5分の足レンジの中で返してくることがある。

この場合、15分まで接続されている。

しかし、この時に、直近の最高最安を超えているかどうかでいうと、超えていない状態。

逆

同

15分まで接続された状態で同逆揃ったとしても、

直近の最高最安越えてない

(弱追加)

同

逆

逆

逆

続いてるけど直近の最高最安越えてない

図：同逆揃っただけではレンジを抜けるか抜けないかの答えは出ない

同逆で向きが同じ方向に揃ったとしても、レンジを超えるかどうかについて、まだ答えが出ていないのであれば、レンジを抜けた形で”同”にはなってないので、ここは、弱追加になるか、多段。

また、下の図のように、15分の足レンジがあって、その中で５分の足が動いていて、１分がレンジから抜けて返してくるという場合。

この場合は、5分の足のヒゲになるだけになる。

1分が抜けて確定してから、次の5分を形成するときに、５分も陽線として確定して、足の転換が起きたのかどうかまで確認する。

５分が下の確定を維持しているのであれば、これは5分としてはヒゲで、１分として多段だったということになる。

5分としてヒゲになる

1

15min

5min

5min

1

1

5min

1

1

図：足レンジを見るときの内方の見方

・実勢で乖離してきたか。

・平均としてどうなのか。

・同逆としてレンジの中にいる同逆なのか、抜けた同逆なのか。

・時間の接続がされているかどうか。

・抜けるところで、MAC/OSが揃っているかどうか。

<収束中の抜け方向(周期特定)>

図：レンジに周期が入ってくるときのイメージ

抜け方向をMAC/OSで見ていくとき、前提としてすでにレンジは特定された状態。

特定したレンジに平均線が入ってきていれば、現在どの周期に近い動きをしているかわかる。

そのレンジの中において、入っている周期の80%まで波が動くとする(端から端まで周期の100%分動くわけではないから)。

そうすると、入っている最大周期の8割の周期で動いているとして、

その8割の周期の半分が平均の周期とする。その半分の周期のさらに半分の周期が、8割の周期に対してどっちに向かっているかを見て、どっちに抜けるかを見ていく。

<考え方、捉え方(山田の言葉)>

■波という前提

マーケットは波を打っている。

なので、マーケットを”波”と捉えて解析していく。

波の特性を追求し、状況状態を把握し、次の動きを補足していく。

色んな指標を使う。

１つの指標だけでは、全部を見ることができない。

それぞれ、その指標で見えるもの、というものがある。

それぞれの指標で見えたものを持ち寄って、答えを出す。

波の動きは大きく２つの要素。

・転換するかしないか(波の頂点が描かれ、進む向きが逆の向きに変わるかどうか)

・どこまで伸びるか

これがわかれば、波の動きがわかったことになる。

マーケットの波を見るとき、ベースの考えとして、

“今を形成するのは、前の時間からの積算になっている”、

というものがある。

波は、連続して繋がっている形になっている。

例えば、平均足で言うと、前の時間で動いた価格の平均の積算が、今足を形成する。

■転換について(まずは転換するのかしないのか)

・足の転換

マーケットで、実勢で見ていると、価格の上下の動きに細かく振られてしまうので、

流れとして見るために、平均足を使う。

マーケットで、今見ている時間の足(今足)が、転換(陽線から陰線に変わる、または陰線から陽線に変わる、など、進んでいる方向としての上下の向きが変わること)するために絶対に必要な条件がある。

それは、前の時間の足(前足)が転換すること。

今足は、前足の積算により形成されるため、前足が転換しない限り、今足の転換は起き得ない。

ということは、前足が転換した場所は、

今足が転換する可能性が発生した場所、ということ。

その場所は、今足が形成されるよりも前の時間で起こるので、

転換する可能性がある場所は、前の時間で特定することができる。

これにより、今足が形成される前に、今足が転換する可能が発生した、ということはわかる。

しかし、これだけでは、実際に転換するのかどうかは見えない。

そのため、実際に転換するかどうか、そして、転換した方向に維持して波が進んでいくのかどうかは、また別のものを見る必要がある。

ここで、そもそも転換する、というのはどういうことか。

足で見る転換は、陰線陽線が逆向きになること。

平均足という指標の特性上どういうことが起これば転換するのか。

例えば、価格が上昇する流れで動いてきていて、陽線が続いていたところで、陰線に変わる転換の場合。

平均足を陰線に転換させるということは、その時間で起きた価格の動きの平均が、始値よりも下回った、ということを意味する。

つまり、前足の動きが、今足の始値よりも下にいる状態を維持していることが、今足を転換するための１つの絶対必要な条件になる。

・足が転換した後、波の頂点を形成して転換するかどうか

次に、足が転換して、その場所が波の転換部分として、波の頂点が形成され、転換した方向に進んでいくのか、を見る。

足が転換しただけでは、波の頂点が形成される、ということにはならない。

例えば、以下のような場合、足が転換しても。波の頂点になっていない場合。

足は転換していても、

波の流れとして、転換して下に行くのか、転換せずそのままの方向で進むのか、まだわからない状態。

図：足が転換しても、波の流れも転換するのかまだわからない状態

そこで、波の頂点が形成されるかどうかを見るために、足一本分の最高値/最安値の幅として、足レンジを使う。

例えば、価格が上昇する流れがあるとして、そこで山の頂点を形成するためには、最高値を更新せず、最安値を更新し続ける状態になること。

逆に、最高値も最安値も更新しない状態ということはどういうことかというと、以下のような図の状態。

図：最高値も最安値も更新しない状態

前足が、今足の始値よりも下にいる状態を維持し、今足の最安値を下回る位置で維持し、さらに、陰線を維持している状態が描かれれば、その流れが今足に接続され、今足が陰線に転換して、波の頂点を形成する、という状態が描けるようになる。

前足が、今足の最安値を更新して、陰線を維持している状態。

これが積み上がり、今足が陰線に転換してその方向を維持するという絵が描けるようになる。

今足

前足

図：今足の足レンジを、前足が陰線を維持して更新し、今足に接続して、今足が転換してさらに波の頂点を形成できる状態。

■頂点が形成されたあとその方向に維持されるか

・トレンドを見る

波の頂点が形成された後、

その方向に維持されて進むのか、を見ていく。

ここで、前提条件。

波を形成しているということは、入ってきたものは必ず出るといこと。

入り続けたり、出続けたりしていたら、山が形成されることがなく、波が形成されない。

マーケット用語に言い換えると、購入されたものは、販売される、ということ。

ということは、直近価格が大きく動いたとしても、過去のものを精算しただけでは、トレンドとして波の流れを形成することができないということを意味する。

トレンドとして波が形成されていくか、また、流れはどちらに向かうのかを見るために、

平均線の動きを使う。平均線は、過去の価格の動きを積算して、平均化したもの。

ここで、マーケットの波は、一定時間で、一定量入り続ける、というものではない。

そのため、価格の動きに対して、価格レンジを設けることで、平均線と足の動きの関係を見えるようにする(足だけだと誤差が生まれる)。

価格レンジは、直近の最高値と最安値によって特定する。

平均線が価格の動きに付いてきて、平均線が価格レンジを抜けてきた時、そちらの方向に向かうトレンドが形成されている、ということが言えるようになる。

※今足に対して、前足の動きを見ている。

過去のものが精算され、新しく入ってきて、トレンドとして上の流れの波を形成できる状態。

入ってきたものが、精算されただけでは、トレンド(平均)としてその方向に進む波は描くことができない。

図：足と価格レンジと平均線

・MACを使って方向を見る

次に、そっちの方向に向かう、というのを１つの指標だけで見るのではなく、他の指標でも同じことを示しているのか、というところを見ていく。

ここでは、平均線と平均線の差を使う。

どこまでの過去を積算して平均化するかによって、10日線、30日線、90日線などの、短い周期と長い周期とそれぞれの周期の平均線を描くことができる。

差を見るということは、概念的に説明すると、

例えば、10日線と30日線の動きで、差がどんどん開いていくとする。

これは直近の価格が動いていっている、ということを意味する。

10日線

30日線

図：10日線と30日線の差が開いていっている状態

差が、プラスに開いていく場合は、直近の価格は上に伸びていて、

差が、マイナスに開いていく場合は、直近の価格は下に伸びていて、

というように見ることができる。

これは、MACという指標で表現されている。

つまり、MACを見ることで、波の流れの方向を見ることができる。

■大きく伸びるのかどうか

指標が示す方向が、揃っているかどうかで、大きくいくかいかないかを見ることができる。指標が示す方向が揃っていたらそれぞれの波がフォローしあって、大きく伸びる。

逆に、指標が示す方向が揃っていないのであれば、波を打ち消し合って、大きく伸びない。ということ。

例えば、MACと共に、OSの向きを見る。

OSはMACの平均とMACの差から作られている指標で、つまりOSも平均線の動きの差から作られている。

MACが示す方向と、OSが示す方向が揃っていたら、それはフォローしあって大きくいくということ。

※どの周期のMACとOSを見るのか

現在の価格の動きが、どの周期に近い動きをしているのかというのを特定し、その特定した周期のMACとOSを見る。

■どのくらい伸びるのか

各時間で算出される指標が示す方向がある。

足、MAC、OS、それらが示している向きは各時間で現在どうなっているか。

内包の時間はどのように動いているか。

これらがどれくらいのフォロー関係にあるかにより、

物理的に表現すると、波の”加速度係数”というものを作ることができ、

状況状態を切り分け、その状況状態での加速度係数を使って、その時点で波がどのくらいいくのか、ということを補足することができる。

■付録

・転換

”転換する”、といっても、マーケットの波で、何が”転換する”のか、整理しておくことが必要。

全て、時刻と価格から形成されているが、描き方によって、いろんな波を見ることができる。

実勢足

平均足

レンジ

平均線

MAC

OS

など、

上記は、全て、同じ数字から、同じ時刻と価格から、形成されている。

・レンジと周期特定

周期を特定するというのは、今動いている価格が、

どの周期に近い動きをしているかを特定する、ということ。

一定時間で一定量入る、という理論を元にしている。

ただ、一定時間で一定量入るわけではないので、その誤差を埋めるために、レンジというものを儲ける。

ここでは、3種類のレンジを設けている。足レンジ、価格レンジ、時間レンジの３つ。

レンジの中に入っている最大周期があるとしたら、そこから周期を特定する。

・内包を見るということ

マーケットの補足において、常に内方関係を見ている(例えば、前足の動きの積算が、今足を形成するため)。

足だけで見た内包関係や各レンジでの内方関係がある。

内方の指標が示す向き、というものを細かく見ていくことで、次の動きを補足する。